

〈報告〉

同朋大学社会福祉学部 2019年度大学教育改革推進事業

「中部圏教育改革ネットワーク」
(旧 産業界のニーズに対応した教育改善・
充実整備事業)
～2019年度の実践報告～

目 黒 達 哉

はじめに

平成 24 年 9 月 20 日に、本学社会福祉学部は、文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充实体制整備事業」に『前に踏み出し、考え抜き、チームで社会と結びつく教育力の成長』というテーマで、三重大学を幹事校として中部圏の 25 大学で応募したところ選定された。選定されたことは、長年培って来た本学社会福祉学部の社会福祉教育が高く評価されたと思われる。なお、平成 26 年度でもってこの事業は無事に終了した。しかし、この取り組みの重要性と大学の首脳部のご尽力により、平成 27 年度からは、引き続き大学の自己資金で運営されることになった。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力(12 の能力要素)から構成されている。「社会人基礎力」は、「職場や地域社会で様々な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」として、経済産業省が 2006 (平成 18) 年から提唱している。この社会人基礎力を、本学社会福祉学部では「福祉実践基礎力」と表現している。福祉実践基礎力とは、「心が動く力」、「じっくり考える力」、「共に生きる力」

の3つの能力（13の能力）から構成されている。「福祉実践基礎力」は、本学の建学の精神である『同朋和敬』の精神の社会福祉現場に具現化する要素として重要であると考えている。

I. 事業の概要と目的

現在まで、本学部では、まず初年次ゼミにおいてゼミ単位でのディベートやプレゼンテーションおよびフィールドワークを行って、能動的で自律的・自立的な学習態度の育成に努めている。そして、2～4年では、演習やゼミにおいて、さらに能動的な学習ができるよう促してきた。また、学外研修での施設見学やボランティア論、ボランティア活動などでの実体験をして、地域や福祉業界との連携を深めている。そして、円滑な学習を進めるためにアドバイザー制度で補完している。そこで、本事業では、今までの個々の教育改善を入学前プログラムと初年次教育の連結のための教材を作成・利用する有機的結合、講義科目での学生参加型授業の拡大、演習科目での共同学習の拡大と問題解決能力の育成、および講義・演習・実習科目との有機的結合を行うことにより、教育改革を全教員がチャレンジしてチームで働いて実施をしている。

このような取組により、従来の学士課程教育を活性化させ、学生の学習意欲の高揚をもたらすことができる。本取組の目的は、産業界（社会福祉現場）のニーズに対応した高度な専門性と実践力を身につけた福祉人材を育成ことである。そこで、本学部の学生が社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材となるための大きな柱は、1. アクティブラーニングを活用した教育力の強化、および2. 地域・産業界との連携力の強化である〔(1) 地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入、(2) 産学連携授業の実施、(3) 地域の産業界と連携した実践的なインターシップ〕である。

具体的には次のようになる。

1. アクティブラーニングを活用した教育力の強化

社会人基礎力向上のため、初期段階としては、初年次教育の基礎ゼミ等でマインド・マップ、KJ法、グループワークを実施している。

2. 地域・産業界との連携力の強化

(1) 地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入

- ①社会福祉現場のOB・OGとの連携による現状理解とニーズ把握「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉学部卒社会福祉関係従事者のつどい」
- ②保育現場のニーズに対応した保育者養成「実践力を高めるキッズカレッジ」
- ③キッズカレッジ実技講習会
- ④介護福祉業界のニーズに対応した社会福祉教育（介護福祉）
- ⑤産業界との協働による「精神障害者サポートプロジェクト」

(2) 産学連携授業の実施

社会福祉現場で活躍している福祉実務家等と連携した実学的な科目を運営する。

- ①キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ、②ボランティア活動、③傾聴活動論、④その他（実務家を招聘する科目）

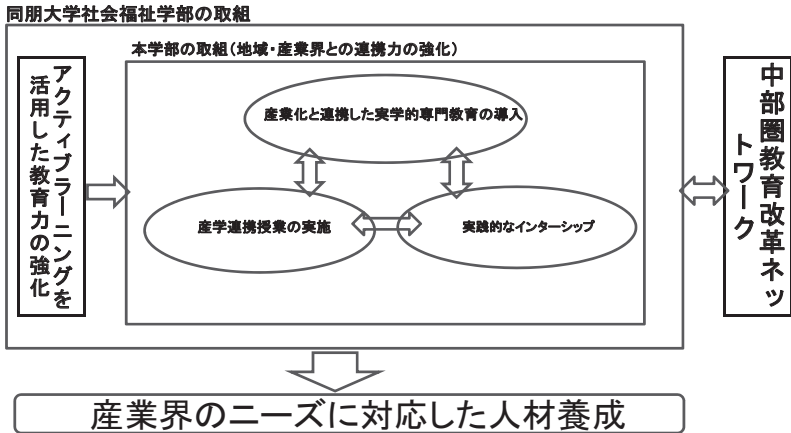
(3) 地域の産業界と連携した実践的なインターンシップの実施

地域の社会福祉施設、NPO法人、NGO団体、ボランティア団体等と協働・連携し、より実践的な内容のインターンシップに質的な変更を行う。

- ①インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

以上のような(1)～(3)の取り組みを有機的・体系的に組み合わせながら、産業界のニーズに対応した人材の育成を図る。さらに、地域の産業界との連携強化を推進し、その成果を検証するために、グループ内の分科会やグループ全体の産学協働連携協議会において本学の取り組みの成功体験、失敗体験を報告する。また、他大学の取り組みを共有し合う中で

共通理解をし、さらなるチャレンジに向けて取り組みの質の向上を図る。



なお、平成 27 年度以降、大学で経費を予算化し継続している。

Ⅱ. 各事業の報告

<地域・産業界との連携力の強化> 「1.」～「14.」

1. 「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉関係従事者の集い」

○目的

テーマである『令和の福祉はどう変わる～福祉×○○～』Part1 を具体的に考え・高め・交流する機会とした。

○内容

今回の学会では、『令和の福祉はどう変わる？～福祉×○○～』Part1 というテーマでいうテーマであった。近年、福祉と異分野の組み合わせによる新たな取り組みが生まれてきた。新しい時代になり、これらの福祉はどのような方向になっておくのか。福祉にかかわる者として、時代が変わっていても大事にし続けなければならないものもちろんある。其れを押しさせながらも、日々変化していく社会なかで、より良い生活を実現するために、どのよ

「中部圏教育改革ネットワーク」

うなことが私たちに求められるかを考える機会になった。今回は、その第1弾して、主に障害者福祉分野における新たな取り組みについて取り上げた。様々の報告から、苦悩、楽しみ、やりがいなどを学び、新たな福祉の時代を切り開く活発な議論の場となった。

このフォーラムは、同朋大学が平成24～26年度まで文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制事業」として実践してきたものを、平成28年度からは大学独自で予算化し、引き続き福祉業界における人材養成に取り組んでいる事業である。

日 時 2019年11月30日（土）
会 場 成徳館502教室
内 容 牛田ゼミ

「認知高齢者に対するグループ回想法の取り組み」
基調講演

「令和の福祉はどう変わる？～福祉×子育て～」

講 師：寺嶋 成人 氏（平成24年度卒）

（社会福祉法人AJU自立の家 障害者ヘルパーステーション・マイライフ）

シンポジウム「令和の福祉はどう変わる？～福祉×〇〇～」

（コーディネーター：福田 充希 同朋大学社会福祉学部4年生）

①福祉×農業	市川 卓美 氏（H29卒）	社会福祉法人ゆめネット 生活介護事業所している
②福祉×知的障害	仲木 秀 氏（H28卒）	社会福祉法人あさみどりの会 べにしだの家
③福祉×音楽	安江 昌人氏 & 市川 風輝 氏	特定非営利法人 ポパイ

○成 果

学生は基調講演、研究発表、福祉現場で活躍しているOB・OGのシンポジウムなどの企画から学生は福祉実践力を高めることができた。また、どのようなことが私たちに求められているのかを考えることができた。

2. 「実践力を高めるキッズカレッジ～学内実施型子育て支援活動～」

○目 的

本学社会福祉学科子ども学専攻では、演習科目に位置付けられている学内型子育て支援事業「キッズカレッジ」を実施しており、豊かな感性やコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、学び続ける意欲など精神面の強い学生を育てることを目的としている。

○内 容・実 績

2019年度は、名古屋市市中村区在住の親子（平日は6ヶ月から就学前の乳幼児、休日は1歳から4歳まで）を対象に前期19回・後期9回、春休み特別会の計23回実施した。平日コースではのキッズカレッジでは未就園児、休日コースでは未就学児までを対象とし、延べ1,135名の地域の子どもとその保護者が参加した。

○成 果

1年から4年次までの学生が、それぞれ自分たちで子ども達とのあそびや活動の計画を立て、実践を通して学修を重ねる機会となった。子どもだけでなく、保護者や地域の支援者の存在があってこそ実現できる保育について、授業で得た知識・技能を実践し、学びを深めた。

3. 「キッズカレッジ実技講習会」

○目 的

キッズカレッジ実技講習会は、同朋大学社会福祉学部社会福祉学科子ども学専攻の学生が主体となって企画運営している「キッズカレッジ」の実践に

向けて、実践力の向上を目的に学ぶ機会を確保するため実施している。

○内 容・実 績

2019（平成30）年度のキッズカレッジ実技講習会は、愛知みずほ短期大学の鈴木安由美先生を講師としてお招きした。内容は現場実習へ行く際に役立つ名札づくりの講習会を実施した。フェルトにデザインを書くところから始まり、縫って完成させるところまで行った。デザインも名前を中心として、子どもにもみやすいもののアドバイスを受けた。一人ひとりが真剣な表情で作成していた。

○成 果

学生は、講習で作成した名札は学外研修で使用し、子どもとかかわるだけでなく、子どもとかかわるうえでの環境を整えていくことの大切さを学び、保育者としての福祉実践基礎力が高まった。

4. 「介護福祉業界のニーズに対応した社会福祉教育（介護福祉）」

○目 的

入学間もない学生を対象とし、施設の使命や、職員の大切にしていることを学ぶ。また、学外研修修了後の振り返り等、研修修了後の学びとする。

○内 容・実 績

介護福祉コースでは、2年次より開始される介護福祉実習の事前学習と、施設のニーズに対応した社会福祉教育をかねて、毎年介護施設「あんしん生活葵」にて研修している。本年度は10月1日に、事前学習として施設職員に学内にきていただき、施設で暮らすお年寄りの様子や基礎的な介護技術、施設で働く魅力について講義を受けた。

10月15日に施設に行き、各階に分かれて施設職員の方に指導を受けながら見学と実践、利用者の方との語らいを午前9時から午後1時まで行った。

10月29日に学内にて事後学習として、施設での振り返りを行った。

○成 果

これらの体験を通じて、高齢者施設で暮らす方とのコミュニケーション技術の向上と、介護技術を学び意欲とともに、将来の福祉現場で活躍するための第一歩をイメージでき、福祉実践基礎力が高まった。

5. 「精神障害者サポートプロジェクト」

○目 的

地域に暮らす精神障害者が日頃利用できる場所として、精神科病院のデイケアや地域活動支援センター、就労継続支援施設などの障害福祉施設や事業所が存在する。それらは、「精神科医療機関を受診していること、精神障害者保健福祉手帳をもっていること」などの条件で利用登録し活用するものであるが、そのような制度などに縛られず、精神障害者がふらっと立ち寄れるような場所の提供を目指すのが、このプロジェクトの目的である。

○内 容・実 績

今年度は学生が「就労支援事業所を利用している精神障害のある方と交流し、様々な気づきを得る」ことを目的に、学内にてお茶会を開催した。開催の企画・運営は学生が担当し、事業所のスタッフからも意見をいただきながら進めることができた。当時は20名の参加があり、楽しい時間を過ごした。

○成 果

終了後、このプロジェクトを準備段階から振り返り、学生たちが気づいたこと、学んだこと、課題等を明確にでき、それを報告書にまとめることができた。

6. 「キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ」

○目 的

社会福祉現場で活躍されている同朋大学社会福祉学部のOB・OGを招聘

「中部圏教育改革ネットワーク」

し、福祉業界のニーズに応える人材育成を目指す講義である。

また、福祉実践基礎力、福祉実践力を高める取り組むでもある。なお、福祉業界のみでなく、企業等で活躍されているOB・OGも招聘し、学生に視野を広めてもらう。

児童福祉、障害者福祉、高齢者福祉、精神保健福祉、教育、国際、心理の各分野で活躍されているOB・OGを招聘し、講義を拝聴し、またOB・OGとコミュニケーションを図る場とする。

○内 容・実 績

①キャリア支援講座Ⅰ（前期・2単位、選択科目）

主として、OB・OGが福祉職を志そうと思った動機や仕事の内容、学生時代をどのように過ごしていたかを中心に講義をしていただくこととする。

②キャリア支援講座Ⅱ（後期・2単位、選択科目）

主として、OB・OGから現場が求めている人材について講義をしていただくこととする。

キャリア支援Ⅰ、Ⅱともに毎週水曜日の3限（13時～14時30分）に実施された。

○成 果

講義を拝聴し、現場が求めている人材像を知ることができ、福祉実践基礎力が高まった。また、OB・OGを身近に感じ、福祉職へのイメージを高めることができた。

7. 「ボランティア活動」

○目 的

ボランティア活動を通して、利用者とのかかわり方を学び、また連携機関との協働のあり方を学び福祉実践基礎力を身に付けることを目的とする。

○内容 社会福祉法人若竹荘あけぼの作業所の連携機関の協力を得て知的障害者の生活介護事業を、また稲葉地区老人クラブ福寿会の協力を得て世代

間交流事業を実施した。活動は『事前学習・準備 ⇒ 実践（活動）⇒ 事後学習（フォローアップ）』という一連の学びの過程を通して福祉専門職としての福祉実践基礎力を身に付ける。いずれも実学的専門教育である「ボランティア活動」の授業の中で実施した。

○内 容・実 績

1) 知的障害者の生活介護事業（あけぼの作業所の利用者と学生の交流会）

「ボランティア活動」の授業時間内で事前学習・準備、事後学習（フォローアップ）を実施した。尚、活動の実績は以下の通りである。

- ① 2019年7月6日（土）10時～15時、同朋大学で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。
- ② 2019年12月7日（土）10時～15時、あけぼの作業所において、学生が企画・立案したレクリエーションによって交流した。

2) 世代間交流事業（稲葉地学区老人クラブ福寿会と学生の交流会）

- ③ 2019年9月28日（土）10時～15時、同朋大学でグラウンドゴルフ交流を実施した。

3) ボランティア活動フォローアップの実施

2019年12月21日（土）13時00分～14時30分、同朋大学において、今年度のボランティア活動の総括とコミュニケーション能力の向上のための学習会を実施した。

○成 果

学生は、知的障害者の生活介護事業、世代間交流事業において、連携機関との協働・連携のあり方を学ぶことができ、福祉実践基礎力は高まった。

8. 「傾聴活動論」

○目 的

傾聴に学ぶ。傾聴士とは何かについて理解し、その役割も知る。同朋大学認定「傾聴士」の資格取得に向けて、その理論と実践のあり方について理解

する。

○内 容・実 績

ボランティア論、カウンセリング論、人間関係論、コミュニケーション論などさまざまな理論を援用して傾聴の態度を身に付ける。また、実際に傾聴活動をしている実践者の特別講義を聴く。さらには1回3時間の予定で高齢者施設に傾聴ボランティアに行く。

1) 受講学生 10名

2) 実施日時

2019年4月10日（水）から2019年7月24日（水）までの水曜日1限（9時～10時30分）15回実施した。

また、2019年7月3日（水）1限は、いなべ市社会福祉協議会の話し相手ボランティア（傾聴ボランティア）養成講座を修了し傾聴活動をしている2名の社会人特別講師と担当職員1名を招いて講義を拝聴した。

○成 果

学生は、講義においてボランティア論、カウンセリング論、人間関係論、コミュニケーション論の基礎理論の学びとそれに関する演習を通じて、傾聴技能を身につけることができた。また実際にいなべ市社会福祉協議会に登録し傾聴活動をしている実践者の特別講義を拝聴し、傾聴力が高まった。

9. 「その他（実務家を招聘する科目）」

○目 的

主に3・4年生のゼミ（社会福祉専攻：社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、子ども学専攻：総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）において、ゼミ担当者がゼミの学習内容を深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘する。そしてスムーズな就業につなげるための一助とする。

○内 容

企業・地方公共団体・社会福祉施設・教育機関等の第一線で働いている実

務家に就業動機、職務内容などの講義を拝聴するとともに、学生が実務家とコミュニケーションを図ることにより、ゼミの学習内容を深める。

○実 績

2019年4月10日から2020年1月21日にまでの講義期間の主に水曜日の2限、木曜日の2限で、専任教員18名のうち、5名がゼミの時間内に1回、各界の実務家を招聘しゼミを実施した。

○成 果

3・4年生の専門ゼミにおいて、ゼミ担当教員がゼミの学びの質をより以上に深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘し、講義を聴くことを通じて福祉実践基礎力ひいては福祉実践力が高まった。

12. 「インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」

○目 的

将来のキャリアに関連した就業体験をする。

協力機関での職務を積極的に行い、実社会で必要な知識・スキル・態度・倫理観を体得する。各自の学習や進路適性を述べることができる。

○内 容・実 績

企業・地方公共団体・社会福祉施設・教育機関等における就業体験を通じて、講義等で得た知識を確認するとともに実社会におけるルールを肌で感じ、社会で生きる上で必要な態度やスキルを身につける。さらに、今後の学習方針を自ら確かめ、進路適性を確認する。

インターンシップ科目は、協力機関での30時間～40時間の従事時間のほか、事前・事後指導を含めた学習をする

①ガイダンス、②学生の関心、適正などから協力機関を決定する、③申込書の提出、④インターンシップ計画書の作成、⑤事前指導、⑥挨拶、下見、⑦協力機関での就業体験、⑧教員等の巡回指導、⑨事後学習

インターンシップは、目的に応じていくつかの類型に分けることができるといわれている。大別すると、(1) 職場体験型、(2) 課題解決型、(3) 実務実践型、(4) 採用直結型という分け方がある。

社会福祉学部では社会福祉現場実習、教育実習やボランティア活動などがインターンシップに該当すると言える。社会福祉現場実習、教育実習は「(3) 実務実践型」に該当し、ボランティア活動は「(2) 課題可決型」に該当すると考えられる。

○成 果

参加学生は、将来のキャリアプランを立て、それに関連した就業体験をすることによって、福祉実践基礎力が高まった。また、学生はインターンシップ先での職務体験を積極的に行うことによって、実社会で必要な知識、スキル、態度、職業倫理観を体得することができ、福祉実践基礎力ひいては福祉実践力が高まった。

Ⅲ. 同朋大学社会福祉学部の福祉実践基礎力とアクティブラーニングについて

○目 的

同朋大学社会福祉学部では、豊かな教養を培って人間と社会に関する心理を探求し、社会福祉及び関連分野に関する専門的知識と技能を習得して、共に生きがいのある社会の実現に寄与するための教育・研究を行っている。そこで、通商産業省が提唱した社会人基礎力をもとに、平成24年度より社会福祉学部の学生に必要な福祉実践基礎力を考案し、毎年測定して教育に反映させるよう努めている。また、教育効果を高めるために、教科内容に合わせてアクティブラーニングの手法も取り入れるよう努めている。

○内 容

本学部の目指す人材を育成するために、初期段階としては基礎学力や専門知識などの育成を図っていて、さらに福祉実践基礎力を目標にして教員や学生を測定しながら育成を進めている。この福祉実践基礎力は、「心が動く力（主体性、協働性、目的性）」、「じっくり考える力（課題分析力、計画力、気づき力）」と、「共に生きる力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレス把握力、ストレス解消力）」の3つの能力から構成されています。前者2つは個人的能力で、最後のものは社会的能力になる。

この福祉実践基礎力を測定するために、学生用には「同朋大学福祉実践基礎力診断票」を作成し、年度末に1～4年生の学生に「学びあい×キャリアポートフォリオ（webポータルサイト）」よりweb経由で入力して集計しています。また、教員には福祉実践基礎力とアクティブラーニング実施状況のアンケート用紙を配布して記入してもらい、集計している。

○実 績

福祉実践基礎力は、社会福祉学部の学生に必要な能力を表す一つの指標として考えられたものだが、各学年とも平成28年度は一旦下がったものの、平成29年度や平成31年度は急に高くなっている。もちろん数値が上下することはあるが、だんだん高い値で安定してきているので、平成31年度はいままでの取り組みが学生たちに持続的なインセンティブを与えてきたからだと推察される。

■福祉実践基礎力の学年別平均点の推移（平成27～31年度）

	心が動く力					じっくり考える力					共に生きる力				
	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度	平成 31年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度	平成 31年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度	平成 31年度
1年生	3.90	3.47	4.08	3.79	4.01	3.64	3.24	3.79	3.67	3.79	3.62	3.30	3.80	3.68	3.79
2年生	4.02	3.37	3.98	3.69	3.85	3.58	3.25	3.67	3.40	3.58	3.67	3.22	3.72	3.61	3.71
3年生	4.23	3.21	3.96	3.71	3.90	4.04	3.05	3.63	3.51	3.62	4.06	3.08	3.72	3.60	3.68
4年生	3.88	3.59	4.13	3.74	4.07	3.57	3.27	3.82	3.50	3.67	3.69	3.43	3.90	3.90	3.91

（注）数値の範囲は1～5で、5に近いほうが各々の力は強い。

次に、福祉実践基礎力と専任教員の育成したい資質との関係をみる。教員の育成したい資質に関係の深い能力は、「じっくり考える力」、「共に生きる力」、「心が動く力」の順になる。そして、下表の能力要素でみると、教員は、「課題分析力」を最も育成したく、次に「自主性」、「計画性」、「主体性」を育成しようと考えている。

■教員が要望したい学生の資質(能力要素)

能力要素	心が動く力			じっくり考える力			共に生きる力						
	主体性	協働性	自主性	課題分析力	計画力	気づき力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレス把握力	ストレス解消力
よく当てはまる	11	8	12	13	12	8	9	7	6	10	2	4	5
どちらかという当てはまる	4	7	3	2	3	7	5	7	8	5	8	6	7
どちらでもない	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	4	5	3
ほとんど当てはまらない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
全く当てはまらない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

最後は、教員のアクティブラーニングの実施状況と学生の能動的な学びとをまとめたものが下表になる。学生参加型授業、共同学習を取り入れた授業、課題解決型学習、プロジェクト型学習、グループワーク、振り返りなどを取り入れている教員が多くいる。いずれのアクティブラーニングでも、学生は能動的に学ぶようになっている。特に、グループワークや振り返りを取り入れた授業では、学生が能動的に学ぶようになっている。

■アクティブラーニングの実施状況と能動的学び

	実施 教員数	学生が能動的に学ぶようになった				
		良い	やや良い	どちらでもない	あまりよくない	良くない
学生参加型授業	15	14	1	0	0	0
共同学習を取り入れた授業	15	12	3	0	0	0
PBL(課題解決型学習)	15	12	3	0	0	0
PBL(プロジェクト型授業)	15	12	3	0	0	0
グループワーク	15	15	0	0	0	0
ディベート・討議	14	10	4	0	0	0
フィールドワーク	14	10	4	0	0	0
プレゼンテーション	15	14	1	0	0	0
振り返り	15	15	0	0	0	0

○成 果

福祉実践基礎力を考案したことは、学生や教員に具体的な学びや育成の方向性を与えてきた。そして、具体的な能力や要素を掲げることによって、学生や教員の目指す教育内容を、人材育成という側面からわかりやすく理解できたと思う。この方向性と教育方法が絡み合って、学生たちのインセンティブが向上しているようだ。

おわりに

同朋大学社会福祉学部では、平成22年度文部科学省大学改革推進等補助金「大学生の就業力育成支援事業」に応募し、「持続可能な福祉実践力を高める取り組み」というテーマで採択された。引き続き平成24年度から平成26年度においては「産業界のニーズに対応した教育改善・充実整備事業」に採択され、中部地区23大学の参加校として、東海Bチームに所属し、「アクティブラーニングの活用」、「地域連携事業」を推進し、福祉実践基礎力、福祉実践力の向上を目指して事業を推進してきた。その後、中部圏教育改革ネットワークの一員として参加校との連携を継続している。

平成27年度からは大学において自己資金を投入し、「同朋大学社会福祉学部 大学教育改革推進事業」として4年間事業を継続している。大学関係者のご理解とご協力に感謝の意を表したい。今回、報告したように、アクティブラーニングを活用した教育内容、地域・産業界との連携力の強化を図る中で、学生の福祉実践基礎力が高まったと考えられる。今後ますます学生の福祉実践基礎力が高まるように、来年度も教育プログラムの質を高めたいと考えている。

注記

- 1) アクティブラーニングとは、授業者が一方向的に知識伝達をする従来型の講義形式ではなく、学生参加型授業、共同学習を取り入れた授業、課題解決型学習やPBL (Problem-Based Learning/Project-Based Learning) など、学生の能動的な学習をとりこんだ授業を総称するもの。

引用文献

- 1) 平成24年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」申請書
- 2) 同朋大学社会福祉学部 2019年度大学教育改革推進事業 同朋大学社会福祉学部教育プログラムの概要,2019.
- 3) 同朋大学社会福祉学会 S学会ジャーナル V o l .20,2019.

参考文献

- 1) 和木康光『同朋和敬 ― 同朋大学のあゆみ ―』中部経済新聞社,2002.
- 2) 中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』2008.
- 3) 角方正幸・松村直樹・平田史昭（共著）『就業力育成論 実践から学ぶキャリア開発支援策』学事出版,2010.

謝辞 この実践報告をまとめるにあたり、中部圏ネットワーク委員会（旧産業界ニーズ委員会）の委員の先生方をはじめ、社会福祉学部の教職員、学務部の教職員の皆様の協力を得た。ここに感謝の意を表します。

（本学社会福祉学部教授：傾聴活動論、ボランティア活動）